書評

Genjun H. Sasaki: Social and Humanistic Life in India

長崎法潤

本書は、その序文にあるように、「学生諸君が自分の専門分野に進み、インド、すなわちインドの精神と理念とを発見するように、学生諸君に近代インドを紹介しようとして」書かれている。ところで、近代インドをとりあげる場合、社会科学によって充分にその本質を解明することができない。インド人の中に深く根をおろしているインドの伝統的精神との関係で、はじめて社会科学の諸問題が明らかにされうる。本書は、このような観点から書かれたユニークなインド理解のための研究書である。英文で出版されているので、国際的に広く読者をえることであろう。

本書は次のように六章からなる。

Ⅰ The Indian Attitude Towards Life
Ⅱ Economics of the Society
Ⅲ Education and the Language Problem
Ⅳ Religion Versus Indian Modernisation
Ⅴ Hindu Ethics and Social Development
Ⅵ Varieties of Psychological-Yogic Interaction
Appendix: A Japanese Legend with the Indian Ideation

第一章では、まず、次のように論じている。インド人は雑多な文化の中にありながら、共通の考え方、共通の伝統をもっている。これが、インド文化を長い時代を通して継続させてきた原動力である。この力の秘密は、インド人が生に対してユニークな態度をもっているところにある。その態度の一つとして、「無抵抗の抵抗」をあげる。アヒンサーの実践は、まさにその態度である。英国にレジスタンスを続け、中共やパキスタンにプロテストしているのも、この力があるからである。哲学的静寂にその本源をおく創造的なこの力によって、インド人は偉大な国民として発展するのである、と論じている。

次にインド人の特徴として、「調和と不調和」をあげているが、これはインドの「否定」がもつ「相対の否定と絶対の領域の表現」の論理を表わしている。アヒンサーも、単なる暴力の否定を意味するのではなく、肯定的な意味、すなわち創造性と活動性とを含んでいる。そこでインド人の人生の究極的な目的は「統一と不統一、調和と不調和の総合」にあるのである。仏教でいう中道も同じ論理に立っている。

それに関連して中道の展開歴史が詳しく論じられているが、いつの間にか問題の焦点が多少ぼやける結果になっている。筆者ならば、インド人の思惟方法を代表する「否定」をとりあげる場合、そこに焦点をしぼり、インド人のものの考え方、生き方に、どのようにはたらいているかについて、哲学、文学、宗教運動、社会運動などにわたって、いろいろな実例をあげながら考察してみようとするであろう。

第三にインド人の自然に対する態度をとりあげる。インド人にとって自然とは、「人間の意志によって支配されるべき対象ではない。」ヴェーダの自然神にささげる讃歌に、古代インド人の自然に対する態度が明瞭に描かれている。単調な自然に抱かれたインド人のもつ自然観と、自然の変化に富む日本人の自然観とを対比させながら論じられ、たいへん興味深い。

第二章では、サンスクリットの loka（社会、世界）の意味、カーストの問題等を論じ、次にパンチャーヤットをとりあげる。その歴史は中世にさかのぼり、行政と裁判との両面に大きなはたらきをもつ、選挙によって作られた村落会議である。一九五二年一〇月二日に Community Development Movement と称する新しい行政組織が生まれ、インド憲法に、州が村落パンチャーヤットを組織して、自治の単位として機能しうるに必要な権限を付与することをうたっている。それにもとづいて村落パンチャーヤットは、政治、経済、福祉、農業等の点で村落の発展に寄与してきている。著者がパンチャーヤットの現状を広く観察した結果、古代インドの村落共同体が果たしていたような機能――経済の改善及び精神的伝統の中心――をすべて果たすべきであると、アドバイスを与えている。

さらにこの章では、経済問題、土地問題など、広くインドの社会問題をとりあげている。とくにこの章では、インド人を読者として予想しながら書かれたのか、痛いところにさわらないでおこうとする配慮が感じられる。それは、著者のもつインドに対する愛情からくるのかもしれないが、インドの社会には、たとえば土地問題をとりあげてみても、批判さるべき問題が山積しているはずである。

第三章では、まず教育問題について論じられている。インドの高等教育機関、研究所の現状が報告され、続いて学問に対するインドの伝統的な仕方や教育の特徴について述べているが、現代教育に欠ける数々の点をわれわれに教えてくれる。とくに「教育研究所でのインド人の文化の学習は、われわれに、いかに現象の小さな部分を分析すべきかを教えるだけである。近代教育で欠けているものは、真理の内的認識のための探求である。それだけが人を存在の核心に導くのである」というラグ・ヴィーラ博士のことばは印象的である。

教育に関連して言語問題をとりあげる。インドには標準語形、方言を数えると八四五のことばがあるという。ヒンディーを公用語、英語を準公用語とし、一四の地方語を公認している。政府はヒンディーの普及に努力し、英語の書物からの飜訳事業をすすめているが、そこに横たわる数々の問題点について述べられている。

この章で論じられている教育は、客観的な立場に立つインドの教育論でも教育行政でもない。教育を中心にした著者のインド観とでもいうべきものである。本書の趣旨からすれば、それは当然である。しかし、現代インドの教育に対する卒直な批判が書かれておらず、はなはだ残念である。

第四章は、本書の中心をなすもので、ページ数からしても全体の三分の一を占めている。まず、「宗教運動と指導者」と題して、

近代インドのナショナリズムとデモクラシーに与えた影響という点から近代の宗教運動をとりあげ、その歴史を概説し、次のように述べている。インドでは宗教的要素は社会条件と深く結びついている。したがって、宗教改革は、非民主社会の改革をめざすことになり、宗教運動は民族運動とともに、インドの文化、社会の発展に貢献してきた。ところで民族運動は宗教の領域をこえ、インド国民の経済、政治の統一を強化する方向に発展するが、宗教改革運動の方は、民族運動を宗派意識と混同するような結果になり、あるものは民族運動に反し、インドの近代化を妨げるものとさえなった。次にガンジーの運動、ネルーの社会主義について論じ、「インドの社会主義は、完全ではないが、宗教的伝統である寛容の精神と西洋の伝統としての合理主義との総合である」と、述べている。

次にヒンズー教、回教、キリスト教、ジャイナ教、シク教、拝火教、仏教の現状に触れ、そのうちヒンズー教には信者の壇家制度がないにもかかわらず、根強く人の心をとらえている理由を適確にまとめあげている。

さらにインドの祭、その背景にある神話、けがれの観念、沐浴などを論じ、最後にカルマの問題をとりあげている。雑多なヒンズー教を二つに分け、「サンスクリット文献、伝統的な祭祀や信仰に認められるもの」を Universal Hinduism と呼び、「ヒンズー教の形而上学的伝統からの要素と、田舎の民間の要素との混合」を Parochial Hinduism と名づけている。カルマに対する考え方も、この二つの場合大きな相違が見出される。Parochial Hinduism では、精神的な解脱よりも、現世での不幸から離れることを望む。それに対して Universal Hinduism では現世での解脱を求める。

第五章では、まず、現在も社会運動、政治運動の基本的原理となっているアヒンサーについて述べ、次にヴィノーバのブァーダーン運動をとりあげ、インドの社会運動の中に見出される倫理的基礎について論じている。ヴィノーバは、経済的、社会的問題がいかに伝統的なヒンズー倫理によって解決されうるかを示したが、これはインドの社会運動の典型である、と記している。

さらにインド人の道徳論をとりあげ、その基盤となっているダルマ（真理）の観念を説く。このダルマは罪の基準でもある。

次にヒンズー教で重要な位置を占めるセックスの問題に言及している。性の力をシャクティといい、創造的な力であり、人間の生の根源となっているものである。したがってヒンズー教寺院に見られるエロチックな彫刻には、すべて哲学的意味があり、現代のインド人の心にも、そのような彫刻に対する心理的反応が残っている、と述べている。

細かい問題であるが、カーマスートラをとりあげて、'Even erotic books such as the Kāmasūtra, give the solution to energy on the first page. Moreover, this book is called *sūtra*—sacred text, because it is not only concerned with the physical or sexual problem, but it is concerned more with the base of human life, namely, creative energy.' (p. 227) と書いておられる。スートラを sacred text といい、このように解釈

するのは少し行き過ぎである。なおスートラという言葉の使い方については拙稿（プラマーナ・ミーマーンサーの研究―著作年代を中心にして―大谷学報・第四五巻・第一号・一九六五）を御覧いただきたい。

第六章では、世界、日本における精神病学の歴史、ヨーガ、ヨーガと精神療法、アメリカでの精神療法の普及の理由、ヨーガとタントラと精神分析学などの相違について語られ、前五章と問題のとらえ方が多少異っている。

アペンディックスとして、日本で行なわれている狐信仰をとりあげ、アニミズムと結びついた収獲の神が、仏教と結びついて変化していったあとをたどっている。

以上本書の内容を、筆者の意見をまじえながら述べたが、インドの社会構造、経済問題、政治、教育、言語問題を論ずる第二章と第三章については、筆者の専門外の領域であり、詳しい批評は、その道の専門家に委すことにする。

なお本書の最後にビブリオグラフィが付されており、非常に参考になる。ただ日本での研究書が紹介されていないのが残念である。日本でも最近、現代インドの研究が盛んになり、すぐれた研究も発表されている。それらについては全く無視されているので、日本には現代インドの研究者が皆無であるような印象を外国の読者に与える可能性がある。そのような誤解を植えつけないために、日本における現代インド研究の現状をアペンディックスに加えていただきたかった。

最初に記したように、本書は、社会科学によるアプローチでは現代インドを充分に理解することが不可能であり、その背景にあるインドの伝統精神との関連において、社会的問題の深い意味を見出そうとするところにある。この方法論については筆者も賛成である。そのためには、まず現代インドの社会構造と人間心理の調査から始めなければならない。その場合最も大切な点は、英語を話さない、教育をうけていない大多数のインド人の中に本当のインドがあることを忘れるべきではない。本書に伝えられている英語を話す階層の意識は、インド人の一部を代表するにすぎず、いわばインドのよそゆきの顔であり、そこから真のインドの心をさぐることにも限界がある。仏教学者である本書の著者（筆者も同じであるが）にそのようなことを求めるのは無法なことであろうが、現代インドの社会問題を論ずるならば、インドでの長い経験をもつ著者には、少くともそのような態度もあってよいのではなかろうか。

現代インドは雑多である。一つの書物によってすべてを言い尽すことは不可能であり、もっと多くの書物が書かれなければならない。この意味で本書も、インドの再発見のために多くの問題提起をなしたことになる。これほど広い社会問題をとりあげながら、よくそれをまとめ、その一つ一つに意味を与えようとする著者の努力は高く評価されるべきである。

(Abhinav Publications, New Delhi, 1971, pp. 291,
Asian Price $5.50 (U. S.))

（本学助教授、インド学）